

早稲田大学審査学位論文
博士（人間科学）
概要書

近世墓にみる江戸の子どもの生と死

Life and Death of Children of Edo, Early Modern
Japan: Implications from Burials

2017年1月

早稲田大学大学院 人間科学研究科

中山 なな

NAKAYAMA, Nana

研究指導教員： 谷川 章雄 教授

近世江戸時代は、大都市の形成、全国的な人口増加と生活水準の向上など、大きな社会的変化が見られた時代であった。また近世社会は、将軍を頂点とする身分・階層社会であった。そうした近世社会において、子どもとはどのような存在だったのであろうか。

東京都心部では、50 件以上の江戸時代の墓地遺跡で、7,000 基以上の墓が発掘調査されてきた。このうち、約 900 基が子どもの墓で占められている。また、現存する墓地においても、江戸時代に造立された墓標が数多く残されていることがある。これら地上に残存する墓標、地下に残存する埋葬遺構、そして出土人骨から成る江戸時代の墓は、子どもの生と死を読み解く上で大きな可能性を持つ。埋葬遺構や墓標からは、当時の子ども墓のあり方や「子ども観」、すなわち子どもという存在のとらえ方を探ることができる。つまり、生と死に関わる社会秩序や心性の側面を読み解くことが可能である。また出土人骨は、当時の人々の身体そのものであり、そこから人々の健康状態に迫ることができる。出土人骨から明らかになる健康状態は、墓制や文献資料に反映される子どもの生と死のあり方に比べ、生活実態を色濃く反映していると考えられ、子どもの生と死の諸側面を構成する重要な側面の一つであろう。

本研究では、都市江戸における子どもの生と死の諸相を総合的に読み解くことを目的とし、江戸時代の埋葬遺構・墓標・出土人骨の観察と分析を行った。その結果、江戸の子ども墓の墓制とその背景となった子ども観、子どもの健康状態について、以下の知見が得られた。

子どもの埋葬と子どもの墓標のあり方は、18 世紀前半頃を境に大きな変化がみられた。埋葬遺構では、18 世紀以降成人と子どもが何らかの側面で区別されるようになり、墓標では 18 世紀中葉以降、子どもの戒名が刻まれた墓標が普及するという変化がみられた。子どもの埋葬における変化は、子どもの死に対し特別な関心が向けられるようになったことを示唆しており、子どもの墓標や子どもの戒名の普及も、「家の一員」としての子どもに対する関心の高まりを反映していると考えられる。いずれも、近世社会全体における子ども観の変容、子育てへの関心の高揚と関連付けられよう。

さらに、子どもに対する関心のあり方は、江戸およびその周辺の社会の内部において必ずしも一様ではなかったと考えられる。上位の身分・階層における子どもの埋葬では、子どもの「家の一員」としての側面が強く意識されていたが、下位の身分・階層における子どもの埋葬では、とりわけ乳幼児が成人とは区別され、「異質な存在」として

の子どもという側面が強く意識されていた。墓標においては、子どもの「家の一員」としての側面が身分・階層問わず反映されていたが、下位の身分・階層では、子どもの年齢がより強く意識されていたようである。

また、江戸の墓地遺跡出土の成人骨を対象に、エナメル質減形成の観察、生前喪失歯、齲蝕、咬耗、歯周病の観察、および死亡年齢構成の分析を行った結果、17世紀から18世紀にかけて乳幼児期の健康状態や死亡率の改善、食生活の変化など、健康状態に著しい変化がみられたことが明らかとなった。この変化は、特定の身分・階層に限定されたものではなく、江戸に居住した集団全体における変化であった。しかし同時に、エナメル質減形成の出現率から、18世紀以降は上位の身分・階層ほど乳幼児期の健康状態が良好であったことも明らかとなった。

17世紀から18世紀にかけての時期は、江戸の都市環境や社会が安定し、生きる上での秩序が確立する時期であった。子どもの墓制や子ども観の変化は、そこに居住する集団の健康状態の変化、および江戸社会全体の変化を連動して生じたものであろう。また、17世紀末から18世紀初頭にかけての時期は、身分・階層の秩序が成立する時期であった。この秩序においては、それぞれの身分・階層が固有の社会を構成する分節的なあり方がみられた。そうした分節的なあり方が人々の健康状態にも影響を与え、さらには多様な子ども観の共存へとつながったと考えられる。

本研究では、近世墓を構成する主要な要素である、埋葬遺構、墓標、出土人骨を全て分析の対象としたことで、子どもの生と死に関わる社会秩序や心性の側面と、健康および生活実態の側面が、近世社会全体と連動する様子がとらえられた。